おわりに―これからの名古屋大学体育会

一九九〇年代以降、名古屋大学は「生涯学習社会の構築」に応えられる役割を求められています。一九九六（平成五）年の生涯学習審議会答申は、大学をはじめとする「高等教育機関は高度で体系的かつ継続的な学習機会の提供者として、生涯学習社会の中で重要な役割を果たす

表5　名阪戦の戦績

種目	勝ち	負け	引き分け
陸上競技	12	30	
水泳	24	29	
硬式野球	27	10	
硬式庭球	7	37	1
バレーボール	8	29	
ラグビー	26	26	1
サッカー	21	22	8
バスケットボール	25	28	
ボート	27	23	
ソフトテニス	25	18	1
ヨット	26	23	2
卓球	22	24	
準硬式野球	23	18	1
柔道	22	18	5
ハンドボール	14	13	1
バドミントン	13	28	
剣道	21	15	1
ライフル射撃	28	8	
空手道	7	25	
弓道	15	21	
体操	5	23	
自動車競技	11	19	
航空	8	13	2
少林寺拳法	9	17	
アイスホッケー	15	11	2
スキー	11	14	1
アメリカンフットボール	6	14	1
ゴルフ	6	5	
ソフトボール	4	10	
フィギュアスケート	0	1	
男子優勝回数	16	33	4
バレーボール	11	21	
卓球	14	27	
ソフトテニス	14	22	
バドミントン	13	19	
硬式庭球	13	17	1
バスケットボール	11	12	
剣道	7	4	1
弓道	6	6	
フィギュアスケート	0	1	
陸上競技	2	0	
体操	2	1	
女子優勝回数	11	32	5
総合優勝回数	12	20	2

表 6　国立七大学総合体育大会の戦績

	主管大学	開催年	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
第1回大会	北　大	1962年	東　大	九　大	北　大	東北大	京　大	名　大	阪　大
第2回大会	九　大	1963年	東　大	九　大	阪　大	京　大	東北大	名　大	北　大
第3回大会	京　大	1964年	東　大	京　大	阪　大	九　大	名　大	北　大	東北大
第4回大会	阪　大	1965年	京　大	阪　大	東　大	名　大	北　大	東北大	九　大
第5回大会	東　大	1966年	東　大	京　大	名　大	北　大	阪　大	九　大	東北大
第6回大会	東北大	1967年	東北大	東　大	京　大	名　大	北　大	阪　大	九　大
第7回大会	名　大	1968年	京　大	名　大	阪　大	東北大	北　大	東　大	九　大
第8回大会	北　大	1969年	北　大	阪　大	東　大	東北大	京　大	名　大	九　大
第9回大会	九　大	1970年	京　大	九　大	阪　大	東　大	東北大	北　大	名　大
第10回大会	阪　大	1971年	阪　大	東北大	名　大	京　大	九　大	東　大	北　大
第11回大会	京　大	1972年	京　大	東北大	名　大	阪　大	東　大	北　大	九　大
第12回大会	東北大	1973年	東北大	東　大	京　大	阪　大	北　大	九　大	名　大
第13回大会	東　大	1974年	東　大	阪　大	京　大	東北大	北　大	九　大	名　大
第14回大会	名　大	1975年	京　大	東　大	阪　大	名　大	北　大	東北大	九　大
第15回大会	北　大	1976年	北　大	京　大	九　大	東　大	東北大	名　大	阪　大
第16回大会	阪　大	1977年	阪　大	九　大	京　大	東　大	名　大	東北大	北　大
第17回大会	九　大	1978年	九　大	名　大	阪　大	京大3	東北大	東　大	北　大
第18回大会	京　大	1979年	京　大	阪　大	東北大	名　大	東　大	九　大	北　大
第19回大会	東北大	1980年	東北大	京　大	北　大	九　大	阪　大	東　大	名　大
第20回大会	東　大	1981年	東　大	東北大	京　大	九　大	北　大	阪　大	名　大
第21回大会	名　大	1982年	東　大	名　大	阪　大	京　大	東北大	九　大	北　大
第22回大会	北　大	1983年	東　大	阪　大	北　大	九　大	東北大	京　大	名　大
第23回大会	九　大	1984年	九　大	阪　大	東　大	京　大	東北大	名　大	北　大
第24回大会	阪　大	1985年	阪　大	東　大	九　大	京　大	名　大	北　大	東北大
第25回大会	京　大	1986年	京　大	東　大	阪　大	北　大	九　大	東北大	名　大
第26回大会	東北大	1987年	東北大	東　大	京　大	名　大	阪　大	北　大	九　大
第27回大会	東　大	1988年	東　大	京　大	名　大	北　大	阪　大	東北大	九　大
第28回大会	名　大	1989年	名　大	東　大	阪　大	京　大	九　大	北　大	東北大
第29回大会	北　大	1990年	北　大	東　大	京　大	名　大	東北大	阪　大	九　大
第30回大会	九　大	1991年	東北大	九　大	名　大	阪　大	京　大	北　大	東　大
第31回大会	阪　大	1992年	阪　大	名　大	京大2	北　大	東　大	東北大	九　大
第32回大会	京　大	1993年	京　大	名　大	東　大	阪　大	九　大	東北大	北　大
第33回大会	東北大	1994年	東北大	名　大	阪　大	北大3	東　大	京　大	九　大
第34回大会	東　大	1995年	東北大	東　大	北　大	京大3	名　大	阪　大	九　大
第35回大会	名　大	1996年	名　大	京　大	阪　大	東北大	東　大	九　大	北　大
第36回大会	北　大	1997年	京　大	名　大	北大2	東　大	東北大	阪　大	九　大
第37回大会	九　大	1998年	九　大	京　大	名　大	東北大	北　大	東　大	阪　大
第38回大会	阪　大	1999年	京　大	東北大	阪　大	名　大	九　大	北　大	東　大
第39回大会	北　大	2000年	京　大	名　大	北　大	阪　大	東北大	東　大	九　大

※同点の場合は大学名の後に順位をいれた。

ことが期待されている」と述べています。また文部省（現在、文部科学省）は、一九九八年に「国立大学等施設の整備充実に向けて‐未来を拓くキャンパスの創造‐」と題した報告書を発表しています。そのなかでは「国立学校施設整備計画指針」における三本の柱のひとつに広く社会に開かれたキャンパスの整備があげられています。そこでは国立大学などのスポーツ・運動施設が地域の人々が利用しやすいように配慮するとともに、公共施設などとの連携、相互の有効活用を図る必要について述べられています。

しかし財政改革を迫られる昨今、スポーツ・運動施設の大幅な改修や増設を見込むことは不可能に近いと思われます。そこで利用時間の延長による対応や、施設の有効活用を目的とした利用システムの再構築が必要ではないでしょうか。

では名古屋大学体育会は、生涯学習社会の構築のために何ができるでしょうか。体育会は、年齢や性別に関係なく学内構成員のさまざまなニーズに対応する組織として生まれ変わることが望ましいのではないでしょうか。

しかし学生自治団体としての体育会は、学生のボランティアによって支えられています。そのためマネジメント業務にも限界があります。したがって学内はもとより自治体や他大学、企業などの外部組織と連携を模索する必要があるのではないでしょうか。

現状のスポーツ・運動施設では、アメリカの大学のように、一般学生や教職員あるいは学外

者が、体育会運動部の練習の制約を受けずにスポーツ施設を使用することは夢物語です。名古屋大学ではキャンパスプランを作成中ですが、体育会が先進諸国の大学スポーツ事情などを紹介するとともに、自身の役割や大学のスポーツ・運動施設の位置づけについてもっとアピールしていくことも大事だと思われます。

最後に最近の名古屋大学体育会で活動している学生のみなさんに読んで欲しい記事があります。一九七一年の『濃緑』にある植田和男体育会委員長の寄せた記事です。

「体育会事業局では、名大全学にスポーツを普及すべく、関係クラブの協力のもとに、毎年種々な行事をおこなっている。しかしながら参加者が少なく、その意図が裏切られることが少なくない。これには主催者の側と、学友の側に大別して二つの原因がある。まず前者であるが、これは名大スポーツの先頭に立つ運動部を中心とする、我々の努力の問題である。第一に、学友のその時々におけるスポーツへの欲求を的確に握む（ママ）ことである。これは常に名大全学のスポーツの現実を把握することを要求する。第二に、その把握のもとに、欲求にマッチした企画を提起することである。去年やったから今年も……では、能がない。第三は、その提起の具体的な方法の問題である。せっかくすばらしい企画を作り上げても、それを知らない学友が多くいるのでは話にならない。徹底した情宣活動が要求される。そして第四には、その企画に参加した学友が、クラスやゼミに戻った時、参加した時のことを多くの学友に楽しく語ってく

れるような企画を作り上げることである。……さらに、運動部と一般学友との日常的な連帯感のなさも、種々な学内大会を不盛況に終わらせているかもしれない。孤立した運動部とスポーツというとソッポを向く多くの学友。これでは、名大スポーツの前途も暗い。この断絶感は絶対に無くさねばならない。ヨット講習会に参加した一学生が、ヨット部へ入部を申しこんだ。バスケットボール大会でも同じようなことがあった。スポーツ人口の底辺での拡大は、運動部にとっても大切なことである。たとえ入部はしなくても、自分達を楽しませてくれた運動部の試合には、応援におこなってやろうという気持ちぐらいは生まれてくるだろう。……」

植田委員長は、体育会会員やそれ以外の学内外の理解があってはじめて大学スポーツが成立しているということを感じていたようです。現在、大学のスポーツや運動を通じてお互いに気持ちの交流や、名古屋大学のアイデンティティが育まれているでしょうか。二一世紀の名古屋大学体育会の使命は、スポーツ・運動をとおして多様な感情、多様な価値観を持つ人々とのよりよいコミュニケーションができる人間をつくることではないでしょうか。

参考文献一覧

名古屋高等商業学校其湛会『剣陵十周年史』（其湛会、一九三一年）
名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史　部局史一』（名古屋大学、一九八九年）

名古屋大学医学部名古屋大学史（医学部）編集委員会編『稿本　名古屋大学医学部百拾五年史』（名古屋大学医学部、一九八八年）
八高創立五十年記念事業実行委員会『八高五十年誌』（八高創立五十年記念事業実行委員会、一九五八年）
名古屋大学体育会『濃緑』（名古屋大学体育会、一九六三〜二〇〇〇年）
岸野雄三編著『体育史講義』（大修館書店、一九八四年）
加賀秀雄「わが国における太平洋戦争への道とスポーツの歴史的動向」（『東海保健体育科学』第二二号、東海体育学会、二〇〇〇年）
高橋義雄「国立大学スポーツ・運動施設における課外時間帯のマネジメント——名古屋大学を事例として——」（『総合保健体育科学』第二四巻、名古屋大学、二〇〇一年）
旺文社『大学スポーツオールガイド　vol一・vol二』（旺文社、一九九九、二〇〇〇年）
文部省生涯学習審議会「地域における生涯学習機会の充実方策について」（生涯学習審議会（答申）一九九六）
文部省大臣官房文教施設部「国立大学等施設の整備充実に向けて——未来を拓くキャンパスの創造——（文部省一九九六）

著者略歴

高橋　義雄（たかはし　よしお）

一九六八年、東京都生まれ
一九九八年、東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学
現在、名古屋大学総合保健体育科学センター講師
専攻　スポーツ社会学

名大史ブックレット3
名古屋大学　スポーツの歩み
二〇〇一年三月三〇日　第一刷発行
二〇〇一年九月一〇日　第二刷発行

著　者　高橋　義雄

編集発行　名古屋大学大学史資料室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
電　話　〇五二（七八九）二〇四六

印刷所　株式会社　クイックス
〒456-0004　名古屋市熱田区桜田町一九―二〇
電　話　〇五二（八七一）九一九〇

表紙写真：名大が主管した第28回国立七大学
総合体育大会開会式

七大学の学長が名古屋大学に集まる。